

アミナ

訳 賀淑芳
及川茜

あのもの悲しい猫たちの鳴き声が舎監を起こしたようだったが、風かもしれなかつた。風が外の長い廊下の窓を吹き過ぎ、現実の中の気に障る音を夢の中に送り込んでいる。舎監は夢の中で女がひとりベッドの横にやって来たのを見る。その女の顔は暗く、造作ははつきりしない。

彼らはあなたに場所を与えて一時滞在させただけなのに、ここは部屋ですらない、とその女は言う。ただ灯りを消せば、真つ暗になるから錯覚するだけ。

舎監は懸命にその女の顔を見ようとすもの、そのうす暗い影がベッドの横に息づいているのしか見えない。彼女はその影をしばらく見つめていたが、恐ろしいとは感じなかつた。冷たい風がどこから吹き込んで来て、彼女が身震いすると、その女は風の中に消えた。窓の下の猫が悲しげな声をあげ、ミミズクが山奥で鳴いているのが聞こえる

ばかりだ。断片的で雑音に満ちた現実が再び四方八方を取り囲む。それら長く伸びた影たちは壁の隅に縮こまり、青白い月の光が斜めに床に落ち、箱のような部屋と、蓋のような天井が、眼前を遮っている。風が扉をガタガタと鳴らし、彼女は起きあがり、扉をきちんと閉めに行こうとして、一列に並んだベッドを見わたすと、少女たちは一列の白い繭のように熟睡している。ただアミナのベッドだけが空で、カバーはめくれ、寝間着は脱いでベッドに放り出してあつた。彼女はぎよつとした。

彼女はそのままベッドに身を横たえ続けることもできなかつたが、どういふわけか布団から抜けだし、外にアミナを探しに出る。廊下はいくらか涼しく、灯りはほの暗い。彼女は探りながらスリッパを履き、大きな芭蕉の葉と建物の落とす影を通り抜け、正門の前に来る。門衛所で、守衛は

帆布の椅子に背をもたせ目を閉じて休んでいるところだった。彼女が指の関節でカウンターをコツコツ叩くと、相手は眠そうな眼で彼女を見た。

アミナが逃げたわ、どこに行っただか——、彼女は言った、もし逃げ出して、万一のことがあつたら、どうしましよう？

こんな時間に、どこに行けるかね？ 相手は言った。彼女は頭に乗せたハジ帽を整えたが、まったく身体を起こそうとする様子はない。

舎監にはわかる、彼女は知っている。アミナがまたあんな格好だったら、敬虔なムスリムならみな恥ずかしさにくたれるだろう。あの期限が延長されてからというもの、アミナは均衡を失い始めた。教師たちはなだめた。もう決まってしまったのだし、上告もできないのだから、現実を受け入れてアミナになるしかないのよ。

アミナは狂ってしまった。まず彼女は長いスカートを引

1 原注 ハジはマレー語の *haji* に由来し、巡礼の意で、イスラームの五行の一つである。ムスリムにとって、ムハンマドが生まれたメッカに巡礼することは生涯で最も重要な旅であり、ハリヤヤ・ハジはこの宗教活動を記念し巡礼者の帰還を祝う祭りである。ハジ帽はムスリムが普段かぶる円形のつばのない帽子のこと。

き裂き、自らを露出した。スカーフを被らず、クルアーンも読まない。そもそも元から読んだりしていなかった。あの日の夕方にはなんと井戸によじ上った。厨房の炊事婦は、アミナはあの晩にとり憑かれたのだと思っていた。日が暮れると街の外の荒野では精霊がうごめき始め、とりわけ森の一带で、それらは霧があたりに立ちこめるのにつれて意志の弱い獲物を物色するのだ。こうした明らかに古い未開の迷信に基づく説に対し、舎監は一貫して何も言わなかった。テレビでこうしたお化けの番組が流れるたび、緊張感が最高潮に達すると、彼女は立ちあがって行ったり来たりし、なんでもない風を装うが、結末は味気なかった。クルアーンがどんな呪術師よりも強大なのだ。しかしこのまだ暗い朝方、冷たい風が吹きぬけて枝葉がざわざわと幽霊の囁きのように音を立てるとき、この上なく荒唐無稽で陰鬱な思いが朝霧と薄ら寒い湿気に従って藪からおぼろに湧きあがると、一陣また一陣と寒気に襲われ、舎監は思わず身の毛がよだつた。風の中のマンゴーの香りは、伝説の人を墮落させる邪な精霊のにおいのように濃く、彼女はスカーフを引つ張り風で冷えきった鼻の頭を覆った。

雨季のうちに野草の丈が伸びていた。あたりは真つ暗で、

何も見えないが、舎監はあの井戸がそこにあり、あのマンガーの木の下に、野草に覆われていることを知っている。その井戸は、今や使う者はない。長年そこにあり、古来林の中でこの井戸に頼って人が暮らしていたらしかった。この井戸は当初からあったもので、リハビリセンターが建設される以前に遡れるほどだ。この土地はもともと軍隊の訓練用の宿営地だったものが、後に宗教局に移管され、中庭が完成し塀が林に沿って築かれると、この井戸も一緒に囲い込まれたのだった。

柵の鉄線にはすべてトゲがついていて、塀には逆巻く波のように鉄条網が幾重にも張りめぐらされており、舎監は歩きながら抜け穴がないかと探した。まさか、まさか逃げられるなんて、抜け穴はないし、閉め忘れた門もないのに。アミナは必ずまだ中にいるはずだ。猫の群れが中庭で追いかけてこしていた。彼らは発情し、交尾し、たくさん猫を産む。猫は多すぎる。猫は出て行ってもいいけれど、人間はだめだ。待たなければならぬ人々もいる。たとえば三ヶ月、たとえば一八〇日。彼らがやって来て出て行く時間はファイルに書き込まれており、人間の生死がアツラーの運命の板に書きつけられているのと同じだ。しかし

誰であれ、逗留する時間は舎監よりはるかに短い。舎監はおおかたここに一番長くいる人間だ。ここはすでに彼女の家となり、目を閉じてでも中庭をひと回りすることができる。彼女より長く滞在する者はいない。裏山から吹いてくる風の音は波濤のように澎湃として、それでもあちこちから次々起こる猫の声をかき消すことはできなかった。厨房は暗く沈んでいて、炊事係はまだ眠っている。どこにもアミナの姿は見えない。

まるで神隠しのようなだった。

しばらくすると、モスクの流すアザーンが響き、厳粛にくつきりと夜明けの山風を切り裂いた。彼女は部屋に戻り、礼拝を始めた。少女たちも次々に起き出し、絨毯に正座して、メッカの方を向き、ほどなく額づいた。

路傍に凋落する者となるなかれ。舎監は心に念じた。アツラーのほかには神なし。

また長く果てしない一日、長く果てしない任務。生活と訓練は際限がないが、そもそも終わりの刻限など無いのだ。命が尽き、俗世が尽きない限り。彼女は窓に向かい、窓の前には光があった。この夜の月光は窓の上の蜘蛛の糸を照らし輝かせている。風が扉の前を吹き過ぎた。扉が

ギイと音を立て、開く。彼女には聞こえる。

アミナが帰ってきた。埃まみれの姿で長い部屋を歩き、絨毯の列の前を通る。どの目も彼女の足の裏を見ている。彼女が歩いたところには泥と草の切れ端が残される。

アミナは天井の下を歩き、礼拝する女の前を通り過ぎる。舎監は不意に祈りのことばが思い出せなくなった。アミナの指は月の光にそぎ取られ、溶けてしまいうるに細い。その身体はごつごつと骨ばって、何もまとっていない。

ほとんど誰もが礼拝をやめ、息を詰めてこの夢遊病の裸女が通り過ぎるのを待っている。彼女らは振り返りはしなかった。彼女らはアミナが後ろに回って行った音を聞く。アミナは自分のベッドに上がる。ベッドからうつすらと物音が聞こえ、ぶつぶつと泡のようだったが、たちまちモスクから流れる朝のアザーンの声に飲みこまれた。

舎監は心に激しい震えを感じた。心の中で念じていた声が途切れた。朝のアザーンが悠揚と「信仰の家」のモスクの屋根から四方に流れている。このよく響く朝のアザーンのほかは彼女には何も聞こえなかった。少女たちは次々に布団に戻った。彼女はまた絨毯に座ったまま、失われたことばを取り戻そうとしていたが、なのに額はふわふわとど

こかに行ってしまったようだった。床板の濡れた足跡が光り、彼女はその形にならない足跡を見つめている。月の光は低い。月は山の向こうに沈んだ。スピーカーから流れるアザーンが厳肅に山谷の風の音と人を苛立たせる猫の鳴き声を呑みこむ。声は高く、蒼穹を貫く。彼女にはもうコロギの声は聞こえない。アミナやほかの誰かのベッドからもう何も聞こえない。

午後の指導の時間は臨時に取り消されたが、もともと学生たちが列になって懺悔をしているはずだった。コーヒーポットが食堂のテーブルに載せられた。コーヒーがテーブルクロスに飛び散り、しみが眼に残り、心にこびりついて、離れない。カップの縁は熱かった。言いたいことが口に出せないとき、彼らは音を立てコーヒーを啜り、何でも少しづつ話したが、何も話さずにいた。

アミナについては、彼らはもともとわずかなことしか知らなかった。一九七五年にケダ州バリンの新村に生まれた。祖父はアブドゥラー・洪で、祖母は徐小英だ。父はハマザ・アブドゥラー、母は高美美、両親はいずれも職業不詳、居住地不詳、判決が下されてもふたりとも姿を現さなかつ

た。非ムスリムの男とクアラルンプールのチェラス・インダ七番街四A小路三五号に同棲していた。レストランのウェイトレス、クラブのホステス、理髪店のサービス嬢の経歴があった。一九九三年に改宗の申請を始めたが、一九九七年八月二十日にシャリーア裁判所でやはりイスラームに帰属するとの判決が下された。彼らが彼女のファイルに目を通しているとき、これらの資料は声に出して読みあげられたが、その声は頭の中をかすめてゆき、ファイルを閉じれば大半は忘れ去られた。忘れてしまえば、彼らが彼女について知るところは実際大しかなかった。ただ彼女がムスリムの子孫で、素行不良で、信仰を裏切ろうとしたことだけを覚えていた。

数ヶ月後、彼らはまたほかのことを知った。それは書類には記されていない。アミナの野性は馴らすことができないということだ。アミナはイスラームを憎んでいた。アミナは夢遊の間に一本の針金で扉の鍵をこじ開けることができた。誰もこうした騒ぎがいつまで続くのかわからなかった。

私には何ができるのかわからない。ある教師が言った。どうすれば彼女を変えられるの？ 舎監は言った。彼女

を見張っているのは無理、鍵を隠しても意味がない。彼女を送り出しては？ 精神病院に行くべきでしょう。テーブルの端に沿って、一列の頭が波のように揺れた。そこで互いに何通かの手紙や、山になった公文書をコーヒーカップの傍らで回覧し、できるだけ目立たぬよう処理しようとした。電話の向こうで言い含める声を再現して、言った。送り出してはだめ。ほかの人が何と言うと思う？ 私たちが彼女を発狂させたって言うんじゃない？

彼女は狂っているんじゃない、ただ夢遊病なのよ。ある教師が主張した。夢遊病は私たちの問題じゃないでしょう。いったいどこがおかしいの？ いったいどうすればいいの？ 悲痛かつ重苦しく、コーヒーカップの縁の唇は引き攣れた。私たちには明らかに思いやりが足りないのよ。テーブルはかすかに揺れ、一本の指がテーブルの上を一言ずつ打ちつけた。私たちが何を反省しなければならぬか考えてみては。

そこで、続く二時間というものの、彼らは互いに耳慣れた言葉を繰り返した。「アッラーの前に隠し事はできない」、「迷える者を正しい道に戻してやらねば」、「できるだけアミナに思いやりを持つて」、「彼らに愛を与えなければ」、

「そうすれば彼らは正しくアツラーを認識できるでしょう」。

それが神が我々に与える試練なのです。ある教師が言った。

彼らは同意し、ビスケットを食べ始めた。雀が地面をぴよんぴよんとビスケットの屑を探し歩いている。この中庭は時間の流れに遮られることはないかのようになり、目新しさの消えた光景が親しいものを感じられた。灌木の茂みが太陽の光を浴びて静かに成長している。

食堂の周りには塀がなく、光は四方から飛びこんで、眩しさにハミドは目を細め、盲目であるかのように感じた。海の波に浸かるときは両目を閉じねばならないように。

わたしたちは神ではない、彼は言った。わたしたちにはあらゆることを知るのとは不可能だ。

ああ、そうだ。もうひとりが言った。わたしたちは神ではない。

これまでのところ、アミナが裸になるのは夢遊のときだけだった。目覚めているときは、いつも服をまとっており、ときにひそかにすすり泣き、ときに平静に話をした。た

だ夢遊のときは、一糸まとわぬ姿で中庭をふらつくのだった。彼らはアミナが逃げ出すことを心配していたのではなく、彼女がどんな姿で目の前に現れるかを気にしていた。ぐるりの塀にはびつしりと鉄の鉤が立ててあるのだから、彼女はどこにも行けるはずがない。鉄条網の外は林と荒野だ。荒野の中を道路が一本ほつねんと通り、半島西岸の南北高速道路と内陸の奥地をはるかにつないでいる。道路に沿って歩けば鉄塔が荒野に佇む姿が眼に入り、空洞の梭がまばらな電線を引いて空を横切っているようだった。夕闇がまもなく訪れようとしており、暗雲は風に吹き散らされ、地平線は最後の反射光の中で霧のごとく海の彼方の島のごとくかすんでいる。

アミナは道々こうした景色を眺めながらやって来たが、ずっと眼をみはっているうち、電線が見えなくなり、木々が見えなくなり、彼方の山脈が姿を消し、林は窓の外にかき消え、天地を覆う黒い霧が辺りを呑み込んだ。

アミナは入ってきたとき、手足は軽くなり、ほとんど立っていられないほどだったのに、心は石のように重く、ごろごろと首にのしかかり、道を歩こうとすれば、両足が地面に引きずられたふた袋の石のように感じられた。昼間

は我慢して口に合わない食事を飲みくだす。夜に身を横たえても、眠りにつくことはできなかった。礼拝に用いる白い長衣を手渡されたとき、彼女は激怒してそれを投げすて、唾を吐きかけて、死んでしまえと罵っては目の前を通つた者をひとり残らず呪詛した。日が経つにつれ、彼女はそれをベッドの足もとに置かれるままにするようになって。人々が彼女のことをあきらめてから、彼女はむつつりと手持ち無沙汰に横たわり、ひとりごとを言ったが、それはここにいる誰も理解することのできない言葉だった。ひとまず彼らを見えないものとし、空気だと思ふことにした。

どういつもこいつも死体だよ。アミナは言った。豚め。

その白い長衣は完璧だったが彼女はそうではなかった。彼女がかつて彼女を捨てた恋人や、そもそも役所に届けることのできない関係、そしていつか流産して失つた胎児のことを思うとき、亀裂が膝の間から彼女の身体を走り、ふたつに引き裂くのだった。ウォンウォン。額の奥から碎ける音が聞こえ、耳の中に密封された。

顔を枕に埋めると、枕は柔らかだった。力をこめて、ふかふかの綿が鼻を押し返すまで押しつけた。あたしの名前が洪美蘭だ。枕に向かって言い、声はしわの中に沈みこん

だ。人々は言うだろう。それは今では無効だ、おまえには二度と自分が洪美蘭だと証明することはできない。それははつきりと法廷で読みあげられたばかりか、しかも、もう控訴することはできないから――すでに行き場がなく、すべては決まってしまう、二度と変えることはできない。アミナ。

髪の毛がしだいに伸びてくると、彼女は自分の髪の後ろに身を隠した。髪の毛を除いてほかに何もなかった。

当初来たばかりの頃、アミナはまだ他人と話をしようとしていた。彼女はときに他人の質問に怒りをあらわにし、または悲しげに舎監に出してくれと頼み込み、あるいは不意に流暢でないマレー語で自身についてできるだけの説明を試みた。彼女もほかの人と同じく、いらいらと教室を出入りした。純粹に昼の灼けつく太陽と退屈な寝室を避けるため、彼女はみなと一緒に移動し、場所を変え、そのほかも他人と同じように、本を読むのを嫌い、図書館には足を踏み入れなかった。実際のところそうした本をめぐってみる者はたいしておらず、ふしだらなふるまいや、教義への違反、性別の混乱やイスラームへの反抗という名

目で強制収容され学習させられる者は、誰ひとりとして図書館に入って正しいことの書かれたパンフレットをめくってみようとはしなかった。

ある人の体内にムスリムの血が流れていれば、死んでもムスリムなのです。

舎監はそう言った。ハミドはそう言った。鉄条網の内側で、ほとんどあらゆる教師がそう言った。

アミナ・ビンティ・ハムザ！ アッラーを信じることは、そんなに難しいかね。

ハミドは困惑して尋ねた。舎監もかつて困惑して尋ねた。鉄条網の中で、同じ疑問はひとつの口からまた別の口へと移動した。

灼熱の午後、風はゆるやかで牛のように遅滞している。扇風機の下ので空気が皮膚に張りつく。

ハミドは汗みずくになって滔々と例を挙げて説明した。クルアーンがいかに完璧であるか！ 彼は言った。一字たりとも余分なものはなく、また一字たりとも欠けてはならない。作者は凡夫ではなく、万能のアッラーだからだ。

アミナは心ここにあらずで、暑さのあまり全身が痒くてたまらなかつた。スカーフを被らず、髪の毛をふり乱し、

むき出しの首には一面に引つ掻いた痕がある。ほかに数人のイスラームを離脱しようとして不首尾に終わった先住民が椅子に座って舟をこいでいた。

スカーフはどうしたのかね？ ハミドは礼儀正しく優しく尋ねた。

アミナは答えず、泥のようにテーブルに伏せ、髪の毛は雑草のように乱れていた。

ハミドは同僚の言葉を思い出した。彼らはアミナは爆発すると火山のようだと言っていた。そこで彼は慎重に言葉を選んで口を開いた。

もし恋人がきみを愛しているなら、こんなことできみを捨てたりしないだろう。ハミドは言った。でも、彼はもう来ないじゃないか。

アミナは何も言わない。

もしお母さんがきみを愛しているなら、ほつたらかしくはしないだろう。わからないんだが、みなきみを愛していないのに、どうしてわざわざ戻ろうとするんだ？ わたしたちのほうがかきみを愛しているのに、どうして受け入れようとしなんだ？ ハミドは言った。

雀が軒下を跳ねまわつてにぎやかにおしゃべりをしてい

る。命あるものはじつとしてはいられない。椰子の樹の落
とす影もとどまることなく揺れ、木漏れ日はときに明る
く、ときに暗くなった。

最初はハミドは風のせいだと思っていた。しばらくして
からアミナが震えているせいだと気づいた。髪の毛の下に
隠れて自身を吸っては吐き、何かが乱れた髪の中に潜んで、
我慢しながら爆発を待っている。アミナのマレー語はぶつぶ
つと途切れながらも、この上なく明晰だった。

どうしてあの死んだ豚のことを言わないんだよ？ 金
なんか一銭もくれたことないのに。おまえたちは、どいつ
もこいつも、マレーの豚だ！ サタンだ！ 歯が痛かろう
がアッラーが必要だろうが、自分のことだろう。他人の服
の裾にまで口出しするんじゃないよ。

ハミドはショックを受け、自分の耳が信じられなかった。
サタンだつて、このわたしをサタンだつて！ 彼はその場を
行ったり来たりして、懸命に彼女を説得しようとした。

そういうふうにはいけない、父親を恨むからといって
神を憎んではならない、アッラーはきみのお父さんに対
してもほかに用意があるのだから。アッラーがきみに用意
したものがするように。ハミドは言った。ふしだらな関係

を持ち、異教徒と一緒になるのは、間違ったことだ。き
みは幸福にはなれるわけがなく、墮落を続けるばかりだ。
もしアッラーを喜ばせることができなければ、そんな人生
には何の意味もない。

アミナの眼は黒い前髪の隙間から彼を睨みつけた。彼女
の口もとは落胆と嫌悪に歪み、手で耳を覆った。

彼はそれ以上アミナの目を見ることなく、うつむき、
アミナの襟ぐりの上の鎖骨のところに視線をやったが、い
つつけたのかわからない傷痕がかすかに見えた。

アッラーの真の恵みは死後にあつて、今日にしているもの
より豊かだと知らなければ……彼はまた言った。

彼女は受けつけなかった。彼は胸が痛み、この娘はアミ
ナという名前を無にしていると思った。その名はひたむき
な忠誠を意味している。この名を持つ者はアッラーに仕え
るべきだ。ハミドはこうして迷いの中にあるアミナを救わ
ねばならず、彼女を沈淪の深淵から救い出さねばならな
いと思った。

アミナはもう希望を抱くことはなかった。誰も来ない。
外の世界は遠く去り、彼女は叫びも泣きもせず、一五〇

日が過ぎてからというもの、同時に来たほかの入所者も押し黙り、ただ雀だけが高く遙かな空でチュンチュンと鳴き交わしていた。木々が風の中でさらさらと鳴る。蟻が草の尖ったへりを歩き、へりは歩みにつれて身体に食いこむ。

法廷から延長令が下された。終点の見えない一八〇日だ。きみがさつさと従うなら、さらに一八〇日間の延長はしないですむ、と彼らは言った。

白い布は舎監の手の中でかすかに輝いている。それは洗濯されて、清潔そうに見えた。おとなしく中に潜りこみ、頭のでっぺんから足の先まで自分をくるんだが、それは大きくすぎ、頭をすっぽり包むと、呼吸につれて震えた。身体にくっついたもう一枚の皮膚のようだった。これからはここに暮らし、この皮膚の中に暮らし、この中で目覚め、そしてこの中で死なねばならない。一八〇日の間。一八〇日の後にはまた別の一八〇日。

黒い洞窟が彼女らの顔を隠し、それぞれの背後に長く影を引いた。長い影は彼女の背後にも引かれ、あごの下、胸の前と、夜になると、誰かが自分と他人の間に横たわり、二つのベッドの間に灰色の人がいるようで、ある声がそのうつろな身体を通してベッドに跳び乗ってきた。

アミナ。アミナ。
もう一度生まれ出よ。

これは幻覚だろうか？ 幻覚だ、遙かに隔てられた歳月と以前の。新たなスタートが切られねばならない、木槌がすでに振り下ろされた以上、二度目が下されることはない。なぜアミナになることを受け入れられないのだ？ 以前の身分はおまえにとつて何の利点がある？ あんな過去がおまえに何を与えたのだ？

白い長衣は彼女らの身体の上でさやさやと音を立てる。絨毯を広げ、正座しては、ほどなく地面に額づく。

夕方の礼拝の後、ハミドはすつきりとした気分、外廊下でコーヒーをすすり、小さじ一杯の砂糖をすくった。雲は低く垂れこめ、ほとんど屋根に触れそうだ。ハミドはぼんやりと手すりに這った緑の、くるりと巻いた蔓を眺めている。葉の表面がつややかに光を反射するのに、感嘆の念を禁じ得ない。長く並んで植えられた水仙は黴菌に感染し、庭師が手当てしたものの次第に枯れかけており、彼は痛ましく思わないではなかったが、同時に世界は確かにこうしたもので、アツラーの思し召しはあらゆる細部に顕現

し、森羅万象はアッラーの無限の慈悲を示しているのだと感じた。

万物にはすべてふさわしい場所がある。

彼は廊下の明かりを点し、そこに腰かけて学生の課題に目を通した。

彼はすべての学生の経歴を覚えているわけではなかった。ひとりにはインドネシア帰りで、隙を狙っては他人を説伏しようとする。シテイ・ハジヤの呪文を唱えさえすれば、地獄の罪から救われると。それから数人の若い宗教学校の教師は、クルアーンの解釈がまったく誤っていた。彼は人々がどうしてここまで愚鈍になれるのか、こうした実現の可能性がないことを信じられるのか、理解できない。

愚かな心には真相を弁別できない。ハミドは考えた。なんと悲しむべきことか。

ハミドは読めば読むほど嘆かわしく感じた。新しい物語などどこにもない、歴史は自身を反復し続けている。学生の週報にはこう書かれたものがあつた。宇宙とはアッラーの夢である。夢だつて？ シテイは夢の中で啓示を受け、自分以外のこの世のすべては夢の幻影であり、幻影は「我」から生まれ、そして「我」とはアッラーであると妄言した。

まったく荒唐無稽だ。ハミドはここにこうした謬論を信じる者がいることを訝しく思った。一切がみな幻影であるなら、天国は何を根拠に信じられるのだろうか？

「彼らは何も信じていない。神を信じず、義務を守らず、天国だけを信じている。」ハミドはノートに書きつけた。「信仰を持たない者が、確かな信仰を持つ者よりずっと弱く、天国の幻想に寄りかかつて生きなければならぬことが見てとれる。」

書き終えると、また不適當だと感じ、黒く塗りつぶして書き直した。「天国はアッラーを畏れ敬う敬虔な魂の帰するところである。」

月が昇ってきたものの、しばらくすると真っ暗になった。黒い影がノートに落ちた。顔を上げて、アミナの姿を見ると、コーヒーをひっくり返しそうになった。

アミナの眼は鼻の両脇に嵌まつていて、ふたつの瞳は見ひらかれていたが、視線は定まらなかつた。ひと目で彼女が眠っていることは見てとれた。彼女の身体は空の船さながらだ。彼女は夢遊のさなかにいたが、座礁して、前に障害物があることを感じたように、前に進みもせず、後退もせず、衣服を身につけず、何ひとつ覆い隠すことなく目の

前に立っていた。

おお、アツラーよ。彼は思わず心の中で真の主呼びかけた。

息を詰めて彼女を見守りながら、この身体に対して困惑を感じずにいらなかった。

彼女の肌には、乳房の上にも、胸にも、腹部にも、どこでつけたのか傷痕が葉脈のように走り、暮れ方の光が溢れ、長いこと欄干のところに息づいていたが、空のようにうす暗く、無風であるかのように微動だにしない。

ハミドは動悸がおさまらぬまま、アミナのその裸の身体の不可思議な傷口に憐憫を感じ、ほとんど手を伸ばして触れたいと思った。サタン、その敵の名がふと頭をかすめ、瞬時に警報が鳴りひびいた。絶壁で馬の手綱を引き締めるように、危ういところですぐさま視線を卓上のクルアーンに移した。アミナは何を夢みているのだろうか？ ある混沌とした考えが脳内で鮮明になろうとしていたが、同時に有るか無いかの煙のようでもあった。おお、アツラーよ。彼はまた呼びかけた。胸苦しさに、クルアーンを手に取ったが、持ち重りして、はたと足もとに取り落とした。

ハミドは女子宿舎に通じる小径を歩いており、黒く湿った木の枝が頭上の夜空を区切り、やりきれなさが焼けたコインのように胸元に張りつく。わたしはかつて異教徒をサタンと呼んだことなどなかった。サタンはサタン、異教徒は異教徒、同じものではない。なのに結局やはり一緒にたにしてしまった、と彼は考えた。そしてまた自己弁護した。いや、負けたのではない、アミナがたためを言うから、耐えられなくなっただけだ。アツラーがわたしたちを通して語りかけるように、サタンも常に機をうかがって人間を利用してしようとしている。急にまた安堵した。幸いさつきはムスリムの尊厳を守ることができた。心に邪念が生まれたら、戒律を犯すことと変わらない。しかし、言ってしまう、思いが何だ？ 現れてはすぐに消え、痕跡を残すこともないのに、どうして頭で何を考えたかがわかるというのだ？ 実際のところわたしは何も考えていない、そもそも真剣に考えたことなどないのだから、たまたま疑念を感じたからといって、それだけのことではないか。誰もが裸体に対して警戒を抱くべきだ。彼は心に念じた。人は入浴と、排泄および妻と同衾するときを除いて裸になるべきではないし、妻以外の裸体に心を動かされてはなら

ない……ああ、アッラーよ、憐れみたまえ。何であろうと、心を基準にしてはならず、行為こそが尺度であるべきで、自分を抑えることができ、欲望にうち勝つたのだから、慶賀に値するのだ。

心は戦場だ。

夕暮れの風が吹き過ぎ、枝葉から水滴が雨のように降りそそぎ、襟元に滴つて首筋を冷やす。彼は落ち着きを取り戻した。舎監に会うと、容儀を整え、簡単に説明し、ふたりは急いで教師の宿舎の前に戻ったが、アミナはすでにそこにはおらず、どこをふらついているのか、ただ廊下に泥だらけの足跡があるばかりだった。

舎監は興奮して言った。ほら、これが性根の腐ったあばずれなのよ、強情は直らない、本当に情けない。

ハミドは腰をかがめて風に吹き落とされたノートを拾った。階段の下の穴まで飛ばされていたのだ。人間にはひとつの本性しかありません、彼は言った。アッラーに頼り仰ぎ見ることです。

舎監はそれ以上言わず、しばらくしてふつふつ言いながら立ち去った。空気は湿って風の音がざわざわと、テーブルの上のノートを吹き乱したが、辺りは以前と同じように

もの寂しく、彼はぼんやりと籐椅子に座り、さつき書きかけていたページに向かい、紙一面の黒く塗りつぶし書き直した痕跡を見て、思いが乱れ、何を考えていたのかわからなくなった。あたかもアミナは本当に現れたのではなく、ただうたた寝の間に横切った夢であるかのようだった。

クルアーンの表紙の金文字がほの暗い光の下でかすかに輝いている。

以前に恋人と密会したときも、慎重にクルアーンのパージを閉じて、引き出しにしまった。留学してマドラサに学ぶ前のことで、それが最後の放埒の機会だと予知していたようだった。あの昔別れを告げた黄昏、窓のカーテンの影が身体に落ちて揺らめき、彼らは激しく抱きあい、短い歯形が互いに深く食いこんだ。今あの迷宮はまたはるばると十年を飛び越えて、このテーブルに陣取り、乱れたノートのページがぱたぱたとひるがえっていた。灯りが夜風に揺らめく。

彼はクルアーンを開き、過去の悲しみと懐かしさに耐えながら、祈禱を始めた。

漆黒の空には永遠に守るに値する純潔があるようだった。しかし、万象が流れてゆく中で誰かを探し求めるよ

うに、彼は痛みを感じはじめた。そうだ、こうして持ちこたえなければならぬ。間違いない。守らねばならぬのは、俗世に抗することのできる純潔な心で、アツラーの愛する敬虔さだ。

考えてみるといい、泥に埋もれての腐爛はどのように起こるか。この泥は酸性で、慣れない人が触れると痛みを感じる。洗い流してから、都会から来た女たちは泥が皮膚を蝕み赤い斑点を残したのに気づく。少し痒いが、かな不快はすぐに消える。彼女らはまだ若く、すぐに快復するからだ。だがもしもつと老いた、老いた身体の上には、死はそこで予定された一幕を先に演じるだろう。

大雨がやって来て、花は散ってしまったが、若い蕾は傲慢に枝についていた。水が流れて大地を潤す。彼方の山の中腹に雲が濃くめぐっているのが見える。湿った雨季だ。胞子は風に従って落ち、素早く繁殖し、木には重なりあつてきのこが生える。鳥が一羽あお向けになって草むらの中に身体をこわばらせ死んでいる。蛙が逃げ出し、雄の蟬が力を振りしぼって鳴き、枯葉には白斑がはびこり、腐蝕は土に黒さを与える。風が吹き過ぎる。

新しい苗が黒い泥から芽ばえる。

少女たちは山のふもとに面した庭の草むしりをしている。雑草の根茎は土の下に網のように蔓延している。オオトカゲが垣根のそばを通り過ぎ、彼女らを驚かせて叫び声を上げさせた。何であれ、こうした日々にもたまには楽しいひとときがあるもので、こうした束縛と規則に取り合わず、心にかけてさえしなければ、素行不良と見なされるこうしたふしだらな女たちは、実際のところ楽しみを見つめるすべを心得ていた。見張りが気を緩めたとき、彼女らの放埒な笑い声と叫び声は山谷にこだまし、鳥の鳴き声や、樹木のざわめきと交錯して海となり、宿舎の反対側まで届き、やがて風に飲まれて消えていった。

泥土がひつくりかえされ、みみずは鉄のシヤベルから逃げて土の中に潜る。ハミドは学生に道理を説いた。

もしただクルアーンを読んでみるだけでは理解できないだろう、自分の身で体験しなければならず、自ら植えたことのある者だけが悟ることができる。人間は弱いものだが、アツラーは偉大な力を持っている。はるか昔からそうであつて、もしアツラーの思し召しに背くなら、人間は何も得ることはできない。

ハミドは言った。

陽光が後ろから照らし、男子宿舎の平屋の建物は地面に大きな影を落とした。彼らはその空き地を耕し、肥料をまき、泥を重ね、新聞紙を敷き、その上にまた肥料をまき、また泥を重ね、幾重にも層をなした。

あのインドネシアから帰ってきた男子生徒は、シテイ・ハジャの呪文を忘れたようだった。自分が刀にも槍にも傷つくことない鋼鉄の身体の主であるつもり男は、今はおとなしく地面を耕している。ハミドは彼らが呪文を唱えて気を放とうとするのではないかと思ったほどのだが。

山側の方では、少女たちがごたごたと瓜や豆、野菜を植えた。宿舎の裏手に、少年たちはバナナや胡椒、芋を植える。ハミドはしゃがみこんで木の苗の周りの土を固め、祖母の葬式を思いだした。生徒に向かって、植物を植えるのと死者を埋葬するのはどちらも *tanam* といい、種子は芽ぶき花を咲かせるが、人間は死んだらただ魂が残るばかりで、死後にどこに行くことができるかは、自分の短い一生のうち、言行がアッラーの思し召しにかなうかどうかで決まると話した。

自然界において、万物は死後によりみかえる。数週間後、

この農園も収穫できる。そのときには彼らは新たな生を得ることができるようだろうか？ そうすれば救いが得られるのだろうか？ ハミドはぼんやりと考えた。終了の前に、彼はいつものように生徒たちに諄々と説きかされた。少年たちは手を泥だらけにして、互いに目交ぜし、にやにやと含み笑いをしたり、ふて腐れた顔をしたりして、誰も真面目に聞こうとはしなかった。彼はつい苛立ち、その場で相手を罵りたくなつたが、やはりこらえた。これら救いを待つ迷える者たちを見て、憐れみを感じた。彼らがまったく彼による救いなど必要ないと明確に態度に表して、いようと、彼はやはり慈愛を持って接したかった。

アミナ。後ろにしゃがんでいた少年が突然大声で叫んだ。彼は虚を突かれたが、その少年の眼がまっすぐにこちらに向けられたまま、彼の背後を見ているので、やっと振り返つたものの、傾きかかった陽光が照らしているばかりで、宿舎の前には光と影がまだらで、廊下はがらんとして、何もおかしいところはなかった。木の影が揺らめき、雀が風の中を滑ってゆき、肉厚の大きな葉が波のようにひるがえり激しく躍っている。彼の視線は上から下まで探したが、しばらくして彼は自分がこの雑多な世界でアミナを探して

いることに気づいた。あの可哀想なアミナ、全身に傷を持っている。彼は放心したように眺めていた。このよく知った風景の中に、よく知っていると同時に異常な何か草むらと花樹の間に身を潜め、暗がりの中、限りなく空の下に眠り、静けさがたちまち辺りを包んだ。

彼はアッラーの慈悲と厳粛な完璧さが確かにそこにあり、万事万物に降臨しており、同時に神聖と墮落が紙一重であることを感じた。彼はすべてが汚れないものであることを望んだ。どこから来たのかわからない思いと渴望が、水のように胸中を揺れ動き、あふれ出しそうだった。

彼は言いたかったが、誰にも言えず、どこにも伝えられず、寂しく向き直って目の前の農園にしゃがんだ迷える者たちを見た。彼は目にした、これらさまざま年齢と背景の生徒たちの、どの目も伝説の裸のアミナを探し求めているのを。

ここまで来ると、ああいったでたらめな話がますます噂されるようになった。夢遊病者が縛りを解く不思議な能力について説明できる者はなかった。厨房で、清掃のおばさんと一部の学生のうち、そうした見方を信じる者もい

た。緊張し、脅え、興奮し、だが何言か口にしてはすぐに口をつぐみ、言葉が邪霊を招き寄せるのを恐れた。しかし、かすかな怯えの中で、この話の流布は加速し、あたかも人々がより渴望を持って聞いては作り出すのを触発するようだった。事務方と教師たちの会議の中、彼らはこの信仰の毀損という問題に気づいた。彼らはそれを完全に排斥することはできなかったしその能力もなかった。この類の迷信的な考えはマレー人の民間と伝統的な習俗にこびりついており、しかも深く人心に入っていたので、根絶することはできず、どれだけの人々がこの道によって焦りを和らげているかは数えきれなかった。そこで彼らは会議で話しあつたものの、まる一週間かけても、何ら結論を出すことができず、クルアンから文句を探して解読しても、意見が分かれ、この様子では討論を続けても、みなの自信と団結をも揺るがす事態に至りかねなかった。誤解を招かぬよう、彼らは最後には院長が休暇から復帰してから話しあうことに決議するよりなかった。これまで若手のホープとみなされてきたハミドは、興味を失って、ひとことも発さずに席を立った。

アミナが帰ってきた。遠くまで出かけて疲れきったかの

ように、戻るなり深い眠りについた。それからの数週間というもの何ら変化はなく、舎監はアミナの喜劇がこんな形で幕を下ろそうとはとても信じられなかった。

幾夜も続けて、舎監はやはり明け方に目を覚ました。いつも寝つけず、屋根にざあざあど雨が降っているのを耳にした。雨滴はばらばらと木の葉を叩き、窓を濡らし、辺りはすっかり静まりかえった。夢うつつに彼女はいくつかの黒い影がアミナの空のベッドをこそこそと取り巻いているのを目にすると、たちまち眠気も吹っ飛び、抜き足差し足で近寄り、北部から来た三姉妹が、また例の病を治すお祓いの儀式を始めたのを見つけた。彼女らはベッドの脇にあぐらをかき、手のひらに痰を吐き、息を吹きかけながらぶつぶつとつぶやき、しばらくするとまた手のひらに息を吹きかけ、小声で呪文を唱えていた。

舎監は低く抑えた声で彼女らを叱りつけた。最初はできるだけおだやかで親しみやすい様子を作ろうとしていたが、しかしその女たちは迷いから覚めようとはせず、相変わらず空中にしなやかな動作を繰り返していた。彼女は思わず痲癩を起こし、胸から鋭く尖った声を押し出した。

その声は三人の女を止めることはできなかった。この

とき舎監は彼女らが別世界に陶醉していることに気づいた。彼女らの目は見開かれていたが、何も映っていないかった。絶えず空中に円を描き、手を振り、引つ込め、唾を吐き、ぶつぶつぶやき、息を吹きかけ、また外に腕を開き、円を描く仕事を反復し、さながら魔物に憑かれたようだった。

舎監ははつと息を飲み、身の毛がよだつのが感じた。彼女らはみな魔物に憑かれているという考えが頭にひらめいた。彼女は辺りを見まわし、突然いくつかのベッドが空になつており、三姉妹のベッドのほか、何人もの姿が見えず、数枚の掛け布団が床に引きずられているのに気づいた。彼女は数歩後ずさりし、失望と恐怖にかられ、たちまちひそかに扉を開けて退出した。

なんとということかしら、アツラーのご加護を。

彼女は雨夜の中に飛びこみ、顔を上げて四方を見たがただ涙を流す空と木が目に入るばかりだった。木は夜の底を貫き、虫の声とミミズクの鳴き声が迷宮の網を織りなし、ささめき声さながらに隠れた地面の穴から吹きだしている。彼女は内心身震いした。傘をさして湿った小径を徘徊するうち、爪先が濡れて冷え、肩と背中も傘から

垂れる水で濡れるのを感じた。彼女は灯りの下の光の輪をひとつずつ通りぬけ、早足で暗がりを通り過ぎ、正門の前の守衛所に小走りに向かった。

彼女は指の関節でカウンターを叩いた。

守衛はいつものようにガラスの向こう側にぼつねんと座っていた。

いないのよ。彼女は言った。逃げたわ——。

何だつて？ 彼は尋ねた。

わからないわ、どうしましょう、彼女は咳きこんで言った。みな取り憑かれて——。

守衛は彼女が予期したような大きな反応は見せず、あくびすらすることなく、ただぼんやりと彼女を眺めていた。

舎監はぶるつと身震いをし、数歩下がった。守衛はじつと目を据えて奇妙なまなざしを彼女に投げかけた。彼の奇怪な表情はどういうわけか彼女を不安にし、ガラスの外と対話する細かい円形の穴が、彼の口もとをぼんやりと見せていた。

彼女はとり乱して道に戻ると行きつ戻りつした。猫が中庭で鳴いている。ときに固い実がコンと乾いた屋根に落ち、すぐに静まりかえるのが耳に入った。枯葉が落ち、か

き消えるように沈黙する。それは不思議なほど深い闇の夜で、月は爪のように弓なりに輝き、彼女は木の階段に腰かけ、一列に並んだ狭い扉を背にしていた。彼女には扉の向こうから聞こえるのがどんな音だかわかっていた。中に残っている少女たちは、しばしばベッドの上で寝言を言ったり歯ぎしりをしたりし、一晩中響き、おまえも夜中に目覚めたときには鳥肌が立つだろう。彼女は二度と聞きたくなかった。階段の前の、コンクリートを敷いた空き地に、風がちょうど地面の枯葉を巻きあげており、枯葉がガサガサと地面をひつかいている。

彼女はくたびれて目をつぶった。

しばらくしてからようやく開いた。

まぶたは乾いて瞬きの音が聞こえるほどだった。傘はまだ手に握られており、乾いていた。コンクリートには雨の跡はない。寒さが頭から足の裏へと波のように下りていった。彼女は立ちあがろうとしたが、尻と両足は麻痺して動かすことができず、あたかも手すりにもたれてしばらくではなくとつくに数時間が経過したかのように、肩は痛み首はこわばっていた。彼女は自分のスカーフに触れた。ふわりと柔らかく、すべすべしている。彼女が決してつけたこと

のないものだ。

アミナ。彼女は考えた。あのいつも夢遊しているアミナ、彼女の身体は何かによつて服の中から吸い出され逃げ出したかのように、服は寢室の床に剥がれて落ちていた。

風がどこからか吹いてくる。満天の星が落ちてきそう。彼女は風の中で寒さに身を震わせつつも、我慢して、立ちたくなかった。実際のところは立ちあがれず、階段に座つて、しびれが解けるのを待つしかなかった。

弓形の月が傾き、しだいに山の後ろに沈んでゆき、彼女は見ながら、内心わかつていた。今はまさに夜明け前のいちばん暗い時刻だ。

庭のいくつかの街灯と、守衛室とモスクのまばらな灯りを除けば、あたりは茫々たる暗闇だが、しばらくすれば、モスクの夜明けのアザーンが響くだろう。それは強力に山中の名も知らぬ獣たちと虫の奏でる調べを呑みこみ、けがれなく神聖にこの川の上流の奥まった内陸の土地に響きわたるだろう。

クルアーンの文句を心に唱えようとしたが、彼女にはほかの句は思ひ出せず、頭にはこの文句だけがあった。敬虔な心は水のごとくに流れ大地を潤す。次の句はもうない。

月影は暗い。彼女は地面を見つめている。黒い地面は底知れぬほど深い。

〔解説〕

賀淑芳 (Ho Sok Fong) は一九七〇年、マレーシアのケダ州出身、ペラ州カンパル在住の中国語作家である。詳細な経歴については本誌一六号「湖面は鏡のように」解説を参照されたい。この一年間の新たな情報を補足しておくとして、二〇一八年五月には短篇小説集『湖面は鏡のように』より表題作がナターシャ・ブルース (Natascha Bruce) によって英訳され、『Granta』一四三号に掲載された。単行本としても Granta Books から全訳が二〇一九年十一月に刊行予定と伝えられる。

華人のイスラームへの改宗については、二〇〇二年の短篇小説「思い出してはならない (別再提起)」(『白蟻の夢魔』所収、豊田周子訳、人文書院、二〇一一年) ですでに扱われているが、本作で描かれるのはイスラームからの離脱を望むものの認められず、そのために矯正施設に送られる華人女性である。

この作品の執筆について、作者は次のように記している。「(…) 改宗したアミナを登場人物とする二篇の小説(イスラームの問題を扱った小説は黄錦樹に促されて再び書いた)、「アミナ」と「風がパイナップルの葉とプルメリア

の花を吹きぬけた (風吹過了黃梨葉與雞蛋花)」は、当初は改宗にまつわる物語をシリーズで書くつもりでいたのだが、考察の末に、アミナとその友人に集中することにし、二〇一二年初頭に筆をとり、毎日繰り返し書き直して、少なくとも三つのバージョンを完成させた。「アミナ」は「アミナにまつわる二、三の事柄(有關阿米娜的二三事)」という題を考えており、その一年間はほとんどひたすらアミナあるいは(洪/張) 美蘭について書き直し続けた。」(『湖面如鏡』自序)

また、アミナの夢遊については、マレーシアの文学者林春美による次の解説も参考になろう。

「アミナの物語の連作においては、主人公のアミナと「信仰の家」のほかの少女たちは、彼女らが選択したのではない宗教的身分に置かれている。国家体制は崇高な理由から、彼女らをその身分の中に安んじさせることを確実にする。数々の訴えが無効であることを宣告されてから、アミナは夢遊を始める。彼女は衣服を脱ぎ、素裸で歩き回り、覆い隠しておくべきものを、ことごとく夜の中に解き放つ。夢遊とは、彼女の逃亡の方法である。しかし、夜明けのアザーンが悠揚と響くとき、アミナはやはり帰っ

てくる。彼女は帰らざるを得ない。「信仰の家」に帰り、スカーフと長衣の中に帰る。目覚めている世界では、彼女は逃げられないのだ。」(『湖面如鏡』推薦序)

洪美蘭(アミナ)のケースでは、父方の祖父アブドゥラー・洪がムスリムに改宗したと思われるが、その息子である美蘭の父も自動的にムスリムとなり、美蘭の身分証もムスリムとして登録されることになる。彼女と恋人が「そもそも役所に届けることのできない関係」だというのは、マレーシアではムスリムと非ムスリムの婚姻は認められていないからである。

ところで、最後に舎監が夜中に目覚め、外を徘徊する場面では、アミナの夢遊が伝染したかのように語りが乱れ始める。少女たちは本当に寝室を抜け出したのか？ 果たしてこの夜は本当に雨が降っていたのか？ 唐突に現れる二人称は、いったい誰から誰に向けられた語りなのか？ そしてアザーンとともに訪れるであろう夜明けは、イスラームの光なのか、それともアミナの中に閉じこめられた洪美蘭にとっての救いをも示唆するのか？ (訳者)

テキスト：

賀淑芳「Aminah」、『湖面如鏡』

台北：寶瓶文化、2014、pp.110-133